

平成 30 年 6 月 13 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K02886

研究課題名(和文) 中国共産党と多民族史論

研究課題名(英文) History of the Development of the Historical Theory of the Unified Multi-Ethnic China by the Chinese Communist Party

研究代表者

吉開 将人 (yoshikai, masato)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号：80272491

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、中国共産党政権が百年をかけて構築し、今日強い影響力を持つに至った「中国多民族史論」の形成・流布の過程について、漢族以外の非漢族の歴史観、中ソ関係からの影響、史料批判の手法の三点を重点として、歴史学の手法によって解明を試みた。明らかにした点は以下の三つである。第一に中国国内に多様な民族史像が存在し、それらの影響関係、緊張関係の中で「中国多民族史論」は形作られていること、第二に20世紀を通じたソ連との両国関係の影響が「中国多民族史論」の形成に大きな影響を与えていること、第三にこれらの研究の基礎となる共産党の史料に対しては史料批判が必要であり、それをいかにして行うべきかという点である。

研究成果の概要(英文)：This study attempted to elucidate the process of formation of the “Historical Theory of the Unified Multi-Ethnic China” that the CCP took a hundred years to establish and still has strong influence in China, with focus on three points--the non-Han people’s view on their own ethnic history and their conflicts with Han Chauvinism, influence of Sino-Soviet diplomatic relations and the importance of text criticism for the CCP’s official historical sources.

The findings of the study were the following three points. First, diverse ethno-historical views exist in China besides the CCP’s official historical view and the “Historical Theory” has formed based on their influences and conflicts with each other. Second, the Sino-Soviet relations throughout the 20th century had great influence on the formation of the theory. Third, it is necessary to use strict text criticism to determine how to use historical sources provided by the CCP as the basis for studies.

研究分野：歴史学

キーワード：中国 歴史 民族

### 1. 研究開始当初の背景

文献と歴史の悠久さを誇る中国の知識人・為政者にとって、歴史、とりわけ「国史」と「民族史」との関係を合理的に説明付けることは、古来、重要課題であり続けてきた。20世紀中国については、特に「ナショナリズム」論との関係で、「国史」の構築をめくり、近年までに多くの研究成果が発表されているが、「民族史」という観点からこの問題に切り込んだ研究は、これまで十分な成果が見られない。

### 2. 研究の目的

本研究は、中国共産党（以下、中共）が百年をかけて構築し、今日強い影響力を持つに至った「中国多民族史論」の形成・流布の過程を、(1) 非漢族（少数民族）エリートの役割、(2) ソ連との関係性、(3) 史料批判の必要性という三つの視点を中心に、歴史学的手法によって解明することを目的とする。

### 3. 研究の方法

本研究は、1949年を挟む、戦中・戦後中華民国期と中華人民共和国建国期の歴史を主な分析対象としている。ところがこの時期の史料は、まず日本国内では根本的に不足しており、また研究の基礎となる史料・文献も台湾と中国に分散し、しかも建国前後の関連史料については政治的制約のために中国国内で一次史料を閲覧できる可能性は皆無である。

こうした状況の中で、本研究の方法は、(1) 包括的な史料収集と(2) 徹底的な史料批判が二つの基本軸となった。

(1) 現在は、中華人民共和国の建国初期に中共の民族政策の確立、あるいは歴史理論の構築において、各種実務を担った関係者たちが、相次いで世を去る時期に相当する。それを機に放出された各種の資料の中には、日本に所蔵されない1940～50年代の貴重文献が数多く含まれる。それらが中国各地の古書市場において頻見される今日、できる限り多くを取り急ぎ収集し、日本に将来する必要がある。中国国内では古書を含む閲覧・流通統制が、日増しに強まっており、これが最後のチャンスと見るべきである。以上の判断により、本研究では、包括的な史料収集を第一の優先作業とした。

その結果、目下最大の関心対象である西南中国については、1940～50年代にかけての関係史料の大半を中国各地の古書市場で収集、それらのほとんど全てを日本に将来することができた。

加えて、中国国内所蔵の中華民国期史料の公文書館である中国第二歴史檔案館（南京）が、折よくも本研究課題に関連する北京政府

内務部および国民政府内政部・（国民党中央）社会部の史料のデジタル化の作業を終え、公開を始めた。また台湾でも中華民国所蔵の中華民国期史料の公文書館である国史館（台北）が、民進党政権下で、デジタル化の作業とインターネット上での公開を加速化した。これらの状況が後押しとなって、研究の基礎となる史料を包括的に調査・収集することに成功した。

この他、中国国内においては国家図書館と南京図書館で、台湾においては国立台湾大学図書館・中央研究院・立法院で貴重な文献資料を閲覧・複製した。

なお、一部の中国国内の図書館・公文書館では、すでに閲覧統制が強まっており、希望した資料・史料閲覧ができなかったものがあることを付言しておく。

しかしながら、以上の諸方向からの収集努力により、不足は可能な限り補完し、本研究課題の終了段階に至って、ようやく所期の包括的な史料収集を果たした次第である。

(2) 本研究では、上記(1)で述べた史料収集の成果をもとに、徹底的な史料批判が行われた。

本研究が主な分析対象とする1940～50年代は、国共両政権の二つの時代にまたがる歴史であり、前後切り離して議論されることが一般的である。また、関連史料も台湾と中国国内に分かれ、記述にも党派対立の影響が顕著である。こうした中、緻密な史料考証で史実を掘り起こし、現地での聞き取りで検証するという史料批判主義的方法によって、中国辺境の新たな歴史像を提示しようとしたのである。

中共による建国前後の関連史料については政治的制約のために中国国内で一次史料を閲覧できる可能性は皆無である。そうした中で、上記(1)で述べた史料収集では、知識人の文集や各種「文史資料」などの「回顧録」的文献と、各レベルの党・政府機関の編纂史料、各レベルの地方政府編纂の「地方志」、1950年代の「少数民族社会歴史調査」資料集などを主たる収集対象とした。それは一般的に「回顧録」という扱いでしか世に出ることがない黨員もしくは党外人士としての本人・関係者の事績を、各種「党史」「地方志」や、「少数民族社会歴史調査」資料集の断片的な記事、および南京・台北所蔵の中華民国期の档案（公文書）と照らし合わせ、史料考証に基づいて史実を確定するためであった。そのままでは鵜呑みにできない回顧録、断片的に過ぎる地方志・資料集、党派的立場からの取捨選択の傾向が強い民国期の档案の記述・文言を、緻密に対比し、丹念に検討することで、史実に迫るのである。

例えば、西南中国において、当局や中央官学アカデミズムに対抗して、非漢族独自の「中国多民族史論」構築を推進したのは、非漢族エリートたちであった。ところが、西南

中国に対して同化主義をとっていた民国政府は、档案中で西南中国の非漢族エリートに言及しても、その民族帰属に必ずしも言及しない場合がある。しかしながら、文史資料や地方志など、建国後の「民族識別」を前提とした中共側の史料の記述を重ね合わせると、民国档案中の記事が、実は非漢族エリートたちの初期の動静を示す貴重な史料であることが判明することがある。

また、今日の中国国内においては「民族団結」が至上命題であるため、非漢族の覚醒に関係する史実は、民族問題としてではなく「反封建」の階級闘争として取り上げられるに過ぎない。ところが、中共側の各種史料に断片的に見える記事に民国档案を重ねてみると、実はそれが民国期の民族問題の一端を反映していることが判明することがあるのである。

政治的制約の下に「忖度」されてきた解釈に対し、中国の体制外に身を置く我々こそが、意欲的に史実を掘り起こし、自由な学術環境の中で再検討を試みるべきである。

#### 4. 研究成果

本研究の成果は以下の三点である。

(1) 第一に、漢族エリートだけではなく非漢族エリートの主張に目配りすることによって、中国国内に多様な民族史像が存在し、それらの影響関係、緊張関係の中で「中国多民族史論」は形作られ、また今日も流動しつつあるという事実を明らかにした。

〔学会発表〕「近代“苗夷”精英的自我認同」は、旧稿「苗族史の近代(七)」(『北海道大学文学研究科紀要』134、2011年、1-55頁)の内容を基礎に、戦後期から建国期にかけての1940年代後半に民族意識を覚醒させ、積極的な政治参加・文筆活動を展開した西南中国の非漢族エリートの事績を論じ、非漢族独自の「中国多民族史論」構築、すなわち当局や中央官学アカデミズムの公定史観に対する挑戦がいかにして始動したのか、という問題について解明したものである。現地西南中国の貴州開催の学会で中国国内の学術界に向けて発表し、反響を得た。

〔学会発表〕「タク鹿の戦」は誰の歴史か」および〔雑誌論文〕「タク鹿」の歴史は誰のものか」は、旧稿「中国民族史像と考古・歴史ナショナリズム」(『歴史と地理』679、2014年、1-14頁)の内容を基礎に、1980年代末から21世紀初頭にかけての、各地の苗族エリートたちによる独自の「中国多民族史論」構築、すなわち当局や中央官学アカデミズムの公定史観に対する挑戦のあり様と、同時期の「中華ナショナリズム」思潮との相互関係について、徹底した史料批判に基づく文献史学的手法により、歴史学的に明らかにしたものである。

(2) 第二に、「中国多民族史論」が20世紀を通じたソ連との対外関係、ソ連学術界からの影響・緊張関係の中で形作られたものであることを明らかにし、それによって中国共産党・中国本位の「一国史」の視点でその形成・流布を論じる現今の公定史を批判し、新たな歴史的評価を提示した。

〔未刊論文〕『中国歴史地図集』的編繪思想 譚其驤与“歴史的中國”論は、中国国内の主要学術誌である某誌に、求められて投稿したものであるが、仄聞するところによると、「上級部門の審査」が必要であるために掲載保留にされている、とのことである。

本論文は、1950~1980年代の中国官学アカデミズムにおける「歴史上の中国(版図)」をめぐる議論が「中国多民族史論」と表裏一体で展開されたものであることを、中ソ関係の変遷を重視しながら論じたものである。前章(1)で述べた史料収集で日本に将来した中共建国後の学術界の動向を反映する各種史料、知識人の「回顧録」などの記事に、中ソ関係に関する各種文献記事を照らし合わせ、徹底した史料批判に基づく文献史学的手法により、それを歴史学的に明らかにした。

本論文の投稿直後、中国国内では「地図管理条例」が制定、翌2016年1月1日から施行され、国境問題などに関係する現勢地図のみならず、「歴史上の中国(版図)」に関係する出版物も、当局の管理統制の対象に含まれることが明記されるに至っている。掲載保留という対応は、これに関連するものと推測され、本研究の問題意識をある意味で具現化した結果と見ることも可能で、きわめて興味深く思われる。

もっとも、上記(1)で述べた「近代“苗夷”精英的自我認同」と「タク鹿」の歴史は誰のものか」が対象とした時期を取り結ぶ時期を主題とした本論文が、本研究期間内に未刊行に終わったことは残念でならない。中国国内での掲載許可を待たず、改めて国内で和文論文として発表、もしくは中文論文のまま台湾で発表することを目指したい。

(3) 第三に、「中国多民族史論」の形成をめぐる研究の基礎となる中共系の史料に対する史料批判の必要性を論じ、「史料批判主義的研究」による克服を、1949年前後の非漢族エリートの動向を論じた研究成果を実例として、学界に提示した。

この問題意識については、前章(2)で具体的に述べた通りである。

〔学会発表〕「中国少数民族は如何にして台湾中央山脈の住人となりしか」は、台湾中部の南投県の山地に暮らす雲南からの移住者たち(漢族・非漢族)を焦点に、1949年から1950年代初頭にかけての雲南辺境社会の動向を論じたものである。関連する先行研究は少なくないが、それらはいずれも「回顧録」を中心とする移住者たち本人のライフストーリーを軸とする。本研究では、それを雲南

現地の「解放戦争」(国共内戦)と「剿匪闘争」(中共による国民党残党の掃討作戦)に関する中共系の各種史料と照らし合わせ、彼ら移民の問題を、「1949年前後の西南中国民族エリートの帰趨」に関する歴史学的問題として論じようとした。目下未検討である台湾所蔵の各種関連文献・史料を収集・調査し、一日も早く、論文として発表することを目指したい。

〔雑誌論文〕「楊砥中と民国晩期の西南中国」はこれと同様な問題意識に基づくもので、「解放戦争」(国共内戦)に国民党軍側で参加した西南中国の彝族エリート、楊砥中の業績を論じ、1949年前後の非漢族エリートの中共を介さない覚醒と社会上昇のあり方を、中共系の史料に対する史料批判によって、解明したものである。

その他、今回の成果を基礎に、次の段階として、本研究の成果(1)(3)を統合し、一回り大きな共同研究の新規プロジェクト(基盤研究(B)平成30~32年度)「1949年前後の西南中国民族エリートの覚醒と帰趨に関する史料批判主義的再検討」(研究代表者:吉開将人)として、次年度へと研究を発展させることに成功したことを付言しておきたい。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

吉開将人、楊砥中と民国晩期の西南中国忘れられた西南民族の「領袖」、北大史学、査読無、57、2017、68-94

(<http://hokudaishigaku.jp/shigaku/>)

吉開将人、「タク鹿」の歴史は誰のものか「炎黄」顕彰問題と二十世紀末中国民族主義の諸相、北海道大学文学研究科紀要、査読無、150、2016、1-75

(DOI: <http://doi.org/10.14943/bgsl.150.r1>)

〔学会発表〕(計3件)

吉開将人「中国少数民族は如何にして台湾中央山脈の住人となりしか」「雲南反共救国軍」と霧社・清境農場の歴史」北海道大学東洋史談話会(北海道大学)、2017年6月23日

吉開将人「近代“苗夷”精英的自我認同“古苗疆走廊”在国族建構中的轉型」「一带一路”視野下的中国西南文化走廊專題研討会(中国・貴州大学)、2017年4月29日

吉開将人、「タク鹿の戦」は誰の歴史か中華民族主義と苗族復興運動の今日、北海道大学東洋史談話会(北海道大学)、2016年5月21日

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

吉開 将人 (YOSHIKAI, Masato)

北海道大学・文学研究科・教授

研究者番号: 80272491